

楠本端山の世界―『端山先生遺書』 詩 訳注（その四）

あらまし 本『研究報告』第三十七号掲載分に引き続き、楠本端山の遺した詩を訳注する。前回分と同様に今回分も端山ひいては宋明儒学者の感性や考え方がよくわかる詩ばかりである。中国文学・思想一般を背景としてそれらが解釈されねばならないことも同様である。陶淵明や白居易らの影響は特に大きい。

一 この訳注（その四）に関わる端山年譜

一八五七年（安政四年 丁巳）三十歳

病氣療養と称して家居す。正月、家廟の建築を計画。二月、家塾（困学寮）をつくる。冬、家廟が完成、神主を安置する。

※『楠本端山碩水全集』³⁾所収の自著年譜をもとにした。

二 訳注

①（三十七） 春夜

【原文】

落花满地似鋪金、曳杖閑吟歩月陰。村北村南饒夜色、此中那処好相尋。

【書き下し文】

落花地に満ちて金を鋪くに似たり、杖を曳き閑吟して月陰に歩む。村北村南夜色饒かなり、此の中那れの処か相い尋ぬるに好き。

【注】

○落花满地：杜甫の「李龜年に逢う」に「正に是れ江南の好風景、落花の時節又た君に逢う。」とある。また、元稹の「三月二十四日留峯館に宿す、夜、桐花に対して楽天に寄す」に「微月桐花を照らし、月微にして花は漠漠たり。怨澹情に勝へず、低回して簾幕を拂う。葉新たにして陰影細く、露重くして枝条弱し。夜久しくして春恨多く、風清くして暗香薄し。……我は山館の中に在り、満地に桐花落つ。」とある。また、章莊の詞「帰国遠」に「春暮れんと欲し、満地落花紅雨を帶ぶ、惆悵たり玉籠の鸚鵡、単り棲みて伴侶無し。……」とある。○曳杖：『礼記』檀弓上篇に「孔子蚤に作きて、手を負い杖を曳きて逍遙し、歌いて曰く……」とある。○閑吟：詩歌などをしずかに口ずさむこと。閑は間と通用する。韓愈の「崔舍人の『月を詠ず』に和す二十韻」に「幽坐して戸を侵すを看、閑吟して庭に満つるを愛す。」とある。また、張籍の「李僕射の『雨中に盧巖二給事に寄す』に和す」に「従容として朝務退き、放曠として掖曹を乖る。尽日來客無く、閑吟して此の懷いに感ず。」と同じく「虔州の韓使君に寄す」に「郡政已に成りて秋思遠く、閑吟して応に官曹を問わず。」と同じく「従弟刪の東歸するを送る」に「春橋酔わんと欲して花を攀りて別れ、野路閑吟して雨に触れて行く。」とある。また、白居易になると「閑吟」という語は題辭として

松崎 賜・吉田仁士¹⁾・林 浩俊²⁾

使用されるのみならず、用例も多くなる。題辞としては、「閒吟」に「従苦して空門の法を学びし白り、平生種種の心を銷尽す。唯だ詩魔有りて降すこと未だ得ず、風月に逢う毎に「一」ら閒吟す。」、同じく「閒吟」に「貧窮は汲汲として衣食を求め、富貴は當營として心力を役す。人生富まざれば即ち貧窮なり、光陰過ぎ易く閒は得難し。我今幸いに窮富の間に在り、朝廷に在りと雖も山に入らず。雪を看、花を尋ねて風月を遊び、洛陽城裏七年の間なり。」、同じく「池上閑吟二首」其の二に「高臥し閒行す自在の身、池辺に六たび見る柳条新たるを。幸いに堯舜無為の日に逢い、義皇向上の人と作るを得たり。四皓再び徐せられて猶お且つ健なり、三州守を罷めて未だ全くは貧ならず。愁うる莫かれ客到りて供給する無きを、家醞香濃し野菜の春。」、同じく其の二に「莊に非ず宅に非ず蘭若に非ず、竹樹池亭十畝余なり。道に非ず僧に非ず俗吏に非ず、褐裘烏帽門を閉めて居す。夢遊の信意寧ぞ蝶に殊ならんや、心楽に身閒なれば便ち是れ魚なり。未だ定めて生と死とを知らずと雖も、その間勝負両つながら如何せん。」、用例としては、「郡齋の暇口に廬山の草堂を憶い、兼ねて二林の僧社に寄す、多く貶官より已来、出処の意を叙す」に「閒吟す四句の偈、静対す一爐の春。会ず応に帰去すること在るべし、松菊をして荒れ教むる莫かれ。」、同じく「行簡を夢む」に「天氣妍和にして水色鮮やかなり、閒吟独歩す小橋の辺。池塘草緑なるも佳句無く、虚しく春窓に臥して阿憐を夢む。」、同じく「残春に懷を詠じて楊墓巢侍郎に贈る」に「清話して襟を開くこと久しく、閒吟して醜を放つこと遅し。落花無限の雪、残鬢幾多の糸。説くこと莫かれ心を傷むるの事、春翁は酒に悲しみ易し。』とある。 ○月陰：月の光。月明かり。謝眺の「随王殿下に奉和す十六首」其の一に「閒階は広き露に塗れ、涼宇は月陰に澄む。」、同じく其の三に「月陰野色洞り、日華に池光麗し。』とある。また、江淹の「阮公に効うの詩十五首」其の一に「戻戻として曙風急に、团团として月陰明らかなり。』とある。 ○村北村南：白居易の「村夜」に「霜草蒼蒼として虫切切たり、村北村南行人絶ゆ。独り前門に出て野田を望めば、月明らかにして蕎麦花雪の如し。』とある。なお、本文全体のイメージに関しては次の作品などは参考にな

る。白居易の「下邳莊南の桃花」に「村南無限に桃花発す、唯だ我れ多情にして独り自ら来たる。日暮れ風吹きて紅地に満つ、人の惜しむを解すること無く誰が為に開く。』とある。 ○饒夜色：「夜色」は夜の景色の意。韓愈の「春雪」に「愁うる莫かれ陰景の促すを、夜色自ら相い饒かなり。』とある。また、劉孝標の「辨命論」(『文選』卷五十四)に「才傑れたらざるに非ずや、主不明ならざるに非ずや、而れども結縁の鴻輝を碎き、懸黎の夜色を残うは、抑そも尺の量、短きこと有れば哉。』とある。また、杜甫の「子規」に「眇眇として春風見ゆ、肅肅として夜色凄し。」、同じく「放船」に「已に城樓の底に泊る、何ぞ曾て夜色闌ならん。』とある。また、張籍の「岡象、玄珠を得」に「暗中に夜色を看、塵外に晴田を照らす。』とある。また、元稹の「閨晩」に「夜色洞房を侵し、春煙簾を透して出ず。』とある。また、白居易の「桐花に答う」に「是の時三月の天、春暖くして山雨晴る。夜色月に向いて浅く、閑香風に随いて輕し。」、同じく「櫛沐して道友に寄す」に和す」に「鐘声東寺に發り、夜色南山を蔽す。』とある。

【口語訳】

落花が地面をおおいつくし、金を敷き詰めたように美しい。杖をついてしずかに詩を口ずさみながら、月影のなかを散歩する。村の北や南には至るところに夜の景色を楽しめる場所があり、あちこち尋ね歩くのにとっても良い晩である。

②(三十八) 春景

【原文】

万紫千紅趁日新、化工随处見天真。此中光景君須占、分与人人一样春。

【書き下し文】

万紫千紅日を趁いて新たり、化工随处に天真を見る。此の中の光景君須く占うべし、人々に分与す一様の春。

【注】

○万紫千紅…本『研究報告』第三十六号三十三頁参照。なお、白居易の「山石榴、元九に寄す」に「根株に数有るも花に数無く、千房万葉一時に新たなり。」とある。○日新…『周易』大畜に「象に曰く、大畜は、剛健篤実にして輝光あり、日に其の徳を新たにす。」同じく繫辭上伝に「日新、之れを盛徳と謂う。」とある。また、『大学章句』伝之二章に「湯の盤銘に曰く『苟も日に新たなれば、日に新たにすして、又た日に新たなり。』」とある。○化工…天が万物をつくつたたくみさ。造化のたくみ。『莊子』大宗師篇に「今一たび天地を以て大鑪と為し、造化を以て大冶と為さば、悪くにか往くとして可ならざらんや。」とある。また、賈誼の「鵬鳥賦」(『文選』卷十三)に「且つ夫れ天地を鑪と為し、造化を工と為し、陰陽を炭と為し、万物を銅と為す。合散消息して安んぞ常則有らん。千変万化して、未だ始めより極有らず。」とある。また、元稹の「春蟬」に「詩を作りて化工の、春蟬をして生ぜしめざるを憐れむ。」同じく「春鳩」に「猶お知る化工の意、当春蟬を生ぜず。」とある。また、白居易の「和答詩十首」のうち「大鶯の鳥に和す」に「誰か能く此の冤を持し、一たび化工を問うを為す。胡然れぞ大鶯の鳥、竟に天年を得て終わる。」同じく「春日閑居三首」其の三に「勞する者は歌を覺らず、其の勞苦の事を歌う。逸する者は歌を覺らず、其の逸樂の意を歌う。我に問う逸すること如何と、閑居して興味多し。我に問う樂しむこと如何と、閑官にして憂累少なし。又た問う俸の厚薄を、百千月に隨いて至る。又た問う年幾何ぞ、七十にして行二を欠けり。得る所皆な望を過ぐ、躬を省みれば良に愧ずべし。馬間にして羈絆無く、鶴老いて禄位有り。設い自ら化工と為すとも、優饒なること只だ是くの如し。安んぞ歌詠せざるを得ん、黙然として天賜を受く。」とある。○天真…(一)自然のまま飾り氣のないこと。事物本来の姿・性質を言う。『莊子』漁父篇に「礼なる者は世俗の為す所なり、真なる者は天より受くる所以なり、自然にして易うべからざるなり。故に聖人は天に法り真を貴び、俗に拘わらず。」とある。また、隋の侯夫人の「春日看梅二首」其の二に「香清くして寒艶好し、誰か是の天真なるを惜しまん。玉梅謝して後陽和至り、郡芳に散与するは自ら春に在り。」

とある。また、李商隱の「荷花に贈る」に「世間の花葉相い倫せず、花は金盆に入るも葉は塵と作る。惟だ有り緑荷紅菡萏の、卷舒開合天真に任ずること。此の花此の葉常に相い映え、翠滅り紅衰えて人を愁殺す。」とある。さらに、(二)礼俗にしばらくられない、ありのままの品性をも言う。王維の「偶然作六首」其の四に「陶潜は天真に任じ、其の性は頗る酒に耽る。」とある。また、李白の「清潭明府姪聿に贈る」に「心和して天真を得、風俗は猶お太古のごとし。」同じく「李青の南葉陽川に帰るを送る」に「心を化して精魄を養い、凡に隠りて天真宵かなり。」とある。また、錢起の「衡門の春夜」に「言を寄す莊叟の蝶、爾と天真を得ん。」とある。また、白居易の「題して定光上人に贈る」に「誤つて聞見の中に落ち、憂喜して形神を傷なう。安んぞ耳目を遺れ、冥然として天真に反るを得ん。」同じく「早春に西湖間に遊び悵然として懷いを興して微之と同じく賞せんことを憶う、因りて思う、越に在りて宮重く事殷んならんことを、鏡湖の遊び、或いは未だ暇あらざらんことを恐る、偶たま十八韻を成して微之に寄す」に「野情は世累を遺れ、醉態は天真に任ず。」とある。○光景…本『研究報告』第三十八号六十八頁を参照。○一樣春…ちなみに次のような表現もある。白居易の「戯れに新栽の薔薇に題す」に「根を移し地を易へ顛倒すること莫かれ、野外庭前一種の春。」とある。

【口語訳】

いろとりどりの花々が日ごとに新しく咲き誇り、天が万物を造り出す働きによって至る所に本性を実現したもの姿が見られる。この景色を言葉にして、人々と同じようにこの春を楽しもう。

【解説】

中国詩の表現は、老荘的な見方を基盤とすることが多い。

③ (三十九) 賞菊

【原文】

東籬秋色至、凜々動清光。常有孤松伴、奈何三径荒。朝英如綴玉、晚節欲凌霜。陶逝無人問、尚存一片香。

【書き下し文】

東籬に秋色至り、凜々として清光を動かす。常に孤松の伴有るも、三径の荒るるを奈何せん。朝英は玉を綴るが如く、晩節は霜を凌がんと欲す。陶逝きて人の問う無きも、尚お一片の香を存す。

【注】

○東籬：東のまがき。陶淵明の「飲酒」其の五に「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る。」とある。また、盧照鄰の「山林休日田家」に「南澗に泉初めて冽なり、東籬に菊正に芳し。」とある。また、錢起の「九日田舍」に「今日陶家野興偏なり、東籬の黄菊秋田に映ず。」とある。また、白居易の「九月八日皇甫十の贈らるるに酬ゆ」に「霜蓬旧髪は三分白く、露菊の新花は一半黄なり。惆悵す東籬同じく酔わざるを、陶家明日是れ重陽なり。」と同じく「閏九月九日独飲」に「偶たま遇う閏秋の重九日、東籬に独り酌みて一たび陶然たり。」とある。○秋色：齊の謝朓以前に用例はないとの指摘がある(3)。謝朓の「三湖を望む」に「歲暮として向には春秀なるも、芸黄として共に秋色なり。」とある。また、盧照鄰の「赤谷安禪師の塔」に「独坐す巖の曲、悠然として俗紛無し。酒を酌みて丹桂に呈し、詩を思いて白雲に贈る。煙霞朝晩に聚まり、猿鳥歳時に聞こゆ。水華秋色を競い、山翠夕暉を含む。高談す十二部、細覈す五千文。如如として数は冥味たり、生生として理は氣氤たり。」とある。また、王昌齡の「広陵に客す」に「秋色は海県に明らかに、寒煙は里閭に生ず。」とある。また、王維の「華子岡」に「飛鳥去りて窮まらず、連山復た秋色。」と同じく「崔漢陽兄季重前山の興」に「秋色に佳興有り、況や君池上に閑なるをや。」とある。また、李白の「秋思」に「海上に碧雲断たれ、單干に秋色来たる。」と同じく「盧司戸に贈る」に「秋色に遠近無く、門を出でて寒山を尽くす。白雲遙かに相い誠り、我を待つ着梧の間。」と同じく「族叔刑部侍郎曄及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ五首」其の一に「洞庭西に望めば楚江分る、水尽きて南天雲を見ず。日落ちて長沙秋色遠し、知らず何れの処にか湘

君を弔わん。」と同じく「秋巴陵に登り洞庭を望む」に「明湖天光を映し、徹底して秋色を見る。秋色何ぞ蒼然たる、際海俱に澄鮮たり。」と同じく「博平王志安少府の山水粉図を觀る」に「博平の真人王志安、沈吟し此に至りて挂冠を願う。松溪石磴秋色を帯び、愁客帰るを思いて曉寒に坐す。」とある。また、杜牧の「白蘋洲に題す」に「溪光初めて透徹し、秋色正に清華たり。静処に生の樂しみを知り、喧中に死の誇りを見る。」とある。○凜々：(一)肌を刺すような寒さ。「古詩十九首」其の十六(『文選』卷二十九)に「凜凜として歳云に暮れぬ、蜩蛄夕べに鳴き悲しむ。」とある。また、潘岳の「悼亡詩三首」其の一(『文選』卷二十三)に「凜々として涼風升起、妙に覺る夏衾の單なるを。」と同じく「寡婦の賦」(『文選』卷十六)に「夜漫漫として以て悠悠たり、寒きこと淒淒として以て凜凜たり。」とある。また、韋応物の「劉評事に送る」に「籠禽は帰翼を羨み、遠守は交親を懷う。況んや復た歳云に暮れ、凜凜たる冰霜の辰なるをや。」とある。(二)畏敬に値する、また、威嚴があるさま。盧照鄰の「詠史四首」其の三に「時來命遂げられず、身を脱して山東に歸す。凜凜たり千載の下、穆然として清風を懷う。」とある。また、白居易の「冬夜錢員外と前に禁中に直す」に「夜深くして草詔罷み、霜月淒として凜凜たり。」とある。ここでは(二)に近い。○清光：月の清らかな光。また、高貴な人の姿。鏡のことも言う。江文通の「荊山を望む」(『文選』卷二十七)に「寒郊に留影無し、秋日は清光を懸けたり。」とある。また、沈約の「王中丞思遠の『月を詠せず』に応ず」(『文選』卷三十)に「洞房殊に未だ曉けず、清光信に悠かなるかな。」とある。また、王勃の「秋夜長」に「秋夜長く、殊に未だ央きず。月明かに白露清光に澄み、層城綺閣遙かに相い望む。」とある。また、張九齡の「樂遊原に登り、春望に懷いを書す」に「万壑に清光満ち、千門に喜氣浮かぶ。」と同じく「東湖に臨泛して王司馬に餞す」に「忽ち懷う京洛より去りて、与に清光を共にし難きを。」とある。また、孟浩然の「張明府の『清鏡歎』に同ず」に「妾に盤竜の鏡有り、清光常に昼発す。」とある。また、王昌齡の「鄭県の陶太公の館中に宿し馮六元二に贈る」に「山月は華陰を出だし、此の河渚の霧を開く。

清光は故人に比し、豁達として心晤を展ぶ。」とある。また、李白の「清漳の明府姪事に贈る」に「清光は毫髪に洞り、皎潔として羣情を照らす。」、同じく「郭季鷹に贈る」に「河東の郭有道、世に於いて浮雲の若し。盛徳無我の位、清光独り君に映ず。」、同じく「早に漆林の渡を過りて万巨に寄す」に「何れの日か清光を覩て、相い飲して佳句を詠ぜん。」、同じく「河州城南の郎官湖に泛ぶ」に「四座は清光に酔いて、飲を為すこと占来無し。」、また、その「并序」にも「夜に方りて、水月練るが如く、清光掇うべし。」とある。同じく「擬古十二首」其の二に「明日看れば随ちんと欲し、窓に当たりて清光を懸く。」、同じく「潘侍御錢少陽を論ずるに贈る」に「君能く此の最下の士を礼す、九州目を拭いて清光を瞻ん。」とある。また、白居易にも月光の意味での用例が多い。著名なものとしては「八月十五日夜禁中独り直し、月に対して元九を憶う」に「三五夜中新月の色、二千里外故人の心。・・猶お恐る清光の同じく見えざるを、江陵卑湿にして秋陰足る。」がある。なお、ここでは菊の姿とみて解釈した。○孤松：一本だけ立っている松の木。松については、本『研究報告』第三十七号三十一頁・三十二頁を参照。「孤松」の用例としては、陶淵明の「帰去来の辞」(『文選』卷四十五)に「景翳翳として以て將に入りなんとし、孤松を撫して盤桓す。」、同じく「飲酒」其の四に「栖栖たり群を失える鳥、日暮れて猶お独り飛ぶ。・・孤生の松に値うに因りて、翮を斂めて遙かに来たり帰る。剽風に榮木なし、此の蔭は独り衰えず。身を託する已に所を得たり、千載相違わず。」、同じく「四時」に「秋月は明暉を掲げ、冬嶺に孤松を秀す。」とある。また、宋之問の「張の老松樹に題す」に「中に喬松の樹有り、我をして長歎息せしむ。百尺寸枝無く、一生自ら孤直なり。」とある。また、陳子昂の「東萊王学士無競を送る」に「孤松宜しく万歳なるべく、衆木は芳春を愛す。」とある。また、張説の「遙かに蔡起居の『偃松篇』に同ず」に「清都の衆木は総て榮芬なるも、伝え道う孤松最も群より出ずと。」とある。また、劉長卿の「雨に対して済陰馬少府考城将少府に贈り、兼ねて成武五兄南華二兄に献ず」に「日は暮れぬ微中の雨、州城は秋色を帯ぶ。蕭條として主人静かに、落葉飛びて息ます。・・吾が

兄即ち時彦、前路は良に未だ測られず。秋水は百丈清く、寒松は一枝直なり。」とある。○三径荒：「三径」は庭の三つの小道。隱遁者の住居の庭。隱者の住居には三つの小道があり、それに松菊竹を植えたという。本『研究報告』第三十六号三十三頁を参照。なお、虞羲の「数名」に「三径日に荒疏たり、徭人は心悦ばず。」とある。また、孟浩然の「陳逸人の故居を尋ぬ」に「人事は一朝に尽き、荒蕪して三径休す。」とある。また、王維の「晚春に嚴少尹の諸公と過ぎらる」に「松菊に三径荒れ、圖書は五車を共にす。」とある。また、劉長卿の「雜詠八首上礼部李侍郎」のうち「湖南羊处士の別業に過る」に「門を杜して白首と成り、湖上に生涯を寄す。秋草に三径蕪れ、寒塘独り一家たり。鳥は村落に歸りて尽き、水は鼎城に向いて斜めなり。自ら東籬の菊有り、年年解して花を作す。」とある。また、白居易の「春深し」に和す二十首「其の二に「何れの処か春深くして好き、春深くして貧賤の家。荒涼たり三径の草、冷落す四隣の花。」とある。○朝英：李白の「李太尉の大いに秦兵百万を挙げ東南を征すと聞く、懦天纓を請うて一割の用を申えんことを冀う、半道にて病みて還る、金陵の崔侍御に留別す十九韻」に「羣公咸く祖銭し、四座に朝英を羅ぬ。」とあるのは、朝廷にある名士たちのことを表す。ここでは菊の花の姿のことか。○綴玉：吳均の「重ねて臨蒸郭某に贈る」に「綴るに青玉を以てし、鏤むるに白金を以てす。」とある。また、沈佺期の「七夕曝衣篇」に「羅を舒し穀を散じて雲霧開き、玉を綴り珠を垂れて星漢回る。」とある。また、李白の「春日に楊江寧及び諸官に陪して北湖に宴し古を感じて作る」に「鴈首倒景を弄し、蛾眉明珠を綴る。」とある。○晚節：晩年の意。晩年の節操をも意味する。本『研究報告』第三十七号三十一頁を参照。なお、張協の「雜詩十首」其の四に「嚙昔は時の遅きを歎き、晩節は年の促るを悲しむ。」とある。また、謝靈運の「魏太子の『鄴中集』に擬す」のうちの「応場」に「晚節衆賢に値い、会同して天宇に庇わる。」とある。また、鮑照の「擬古八首」其の二に「晚節世務に従い、障に乗り遠く戎を和す。」とある。また、張説の「九月茱萸山に進む五首」其の五に「晚節に重九を飲び、高山上ること五千。醉中に聖に遇うを知り、夢裏に仙

を尋ぬるを見る。」とある。また、張九齡の「懐いを敘す二首」其の二に「晩節に卑秩に従い、岐路は良に一に非ず。」とある。また、王維の「房盧氏館に贈る」に「達人に可ならざる無く、己を忘れて蒼生を愛す。豈に復た十室を少しとせん、弦歌して両楹に在り。浮人は日に已に帰り、但だ坐して農耕を事とす。・・・鄙夫も心に尚ふ所あり、晩節は平生に異なり。將に海岳の居に従い、静を守りて天刑を解かんとす。」とある。また、高適の「五十七管記に贈別す」に「晩節に曩の賢に蹤い、雄詞は当世に冠たり。」とある。また、劉長卿の「秋夜に高三十五適を懷う有り、兼ねて空上人に呈す」に「晩節に君に逢いて道に趣くこと深く、茅を結び樹を栽うること東林に近し。」とある。また、白居易の「我が年」に和す三首「其の三に「夙懷は箕穎を慕い、晩節は松籛を期す。」、同じく「松を栽う二首」其の二に「愛す君の晩節を抱くを、憐れむ君の直文を含むを。」とある。○凌霜：謝惠連の「離合二首」其の一に「嘯歌して亦た何をか言わん、肅爾たり霜を凌ぐの節。」とある。また、虞羲の「橘」に「独り霜を凌ぐの橘有り、榮麗として中州に在り。」とある。また、駱賓王の「秋日」に「露を衰いて珠暉冷く、霜を凌ぎて柱影寒し。」とある。なお、陶淵明の「郭主簿に和す二首」其の二に「陵岑に逸峰聳ゆ、遙かに瞻れば皆な奇絶たり。芳菊は林を開きて耀き、青松は巖に冠して列す。懷う此の貞秀の姿、卓として霜下の傑たるを。」、同じく「乙巳の歳三月、建威の参軍と為り、都に使いして錢溪を経」に「園田をば日日に夢想す、安んぞ久しく離析するを得ん。終懷は壑舟に在り、諒なるかな霜柏に宜し。」、同じく「飲酒」其の八に「青松東園に在り、衆草其の姿を没す。凝霜異類を殄つも、卓然として高枝を見る。挾に連なるとき人覚らず、独樹衆乃ち奇とす。・・・吾が生夢幻の間、何事ぞ塵囂に繼がれん。」とあるのも参照。○無人問：『論語』微子篇に「長沮桀溺耦して耕す。孔子之れを過ぐ。子路をして津を問わしむ。長沮曰く。『夫の輿を執る者は誰と為す。』と。子路曰く『孔丘と為す。』と。曰く『是れ魯の孔丘か。』と。曰く『是れなり。』と。曰く『是れならば津を知らん。』と。」とある。また、陶淵明の「桃花源の記」に「津を問うもの無し。」、同じく「癸卯の歳、始春に田舎に懷古

す二首」其の二に「耕種時有りてか息む、行く者津を問う無し。」、同じく「飲酒」其の二十に「如何ぞ絶世の下、六籍一たびも親しむ無く、秋日車を馳せて走り、津を問う所を見ざる。」とある。また、劉長卿の「石園峯」に「前山に秋色を帯び、独り往く秋江の晩。・・・渡口にて漁家に問う、桃源路の深淺を。」とある。また、白居易の「病中に樊大の書を得」に「荒村の破屋に年を経て臥す、寂として絶えて人の病身を問う無し。」、同じく「秋涼閒臥」に「幽閒にして竟日臥す、衰病にして人の問う無し。」とある。○一片香：「一片」の語については、松浦友久氏に詳細な考察がある³⁵⁾。ここでは、抽象的なものを示す用例をあげる。孟浩然の「朱大の棹に入るを送る」に「遊人五陵に去り、宝剑直い千金。手を分ちて脱して相い贈る、平生一片の心。」とある。また、王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る二首」其の一に「洛陽の親友如し相い問わば、一片の冰心玉壺に在りと。」とある。また、白居易の「元八侍御の『升平の新居』に和す四絶句」のうち「高亭」に「好く落日の斜めに銜む処を看れば、一片の春嵐は半環に映ず。」、同じく「九日の宴集に酔いて郡楼に題し、兼ねて周殷二判官に呈す」に「人煙樹色に隙罅無く、十里一片青として茫茫たり。」、同じく「白蓮池に舟を汎かぶ」に「誰か一片江南の興をして、我を逐いて慇懃に万里に來たらしめん。」とある。

【口語訳】

東のまがきのところの菊に秋の気配がおとずれ、花の威厳ある姿は清らかな光を發している。一本生えた松だけがお伴をして立っているが、この三径の荒れた状態では人目につかなくても仕方がない。花の咲き誇る姿はまるで玉を連ねたようであり、咲き続けていつまでも霜に負けない強さを見せる。淵明が死んで世俗に流されない生き方をしようとする者もいなくなってしまう、ただ、彼の愛した菊、その香りのみがここに残っている。

【原文】

東郊迎気日、生菜試辛盤。池柳将垂緑、苑花未点丹。凍融魚噉暖、風軟鳥声寛。物々含春意、須要子細看。

【書き下し文】

東郊迎気の日、生菜に辛盤を試む。池の柳は将に緑を垂れんとし、苑の花は未だ丹を点ぜず。凍融けて魚噉暖かく、風軟らかく鳥声寛く。物々に春意を含む、須く子細に看んことを要す。

【注】

○東郊：陶淵明の「時運」に「邁邁たる時運、穆穆たる良朝。我が春服を製ね、薄らぐ言に東郊にゆかん。」とある。また、沈佺期の『立春に遊苑して春を迎う』に奉和すに「東郊暫らく転ず迎春の仗、上苑初めて飛ぶ行慶の杯。」とある。また、王維の「補郎中を送る」に「東郊春草の色、馬を駆りて去ること悠々たり。」とある。また、韋応物的「東郊」に「吏舎に跼として年を終え、郊に出でて清曙曠し。楊柳は和風を散じ、青山は吾が慮を澹くす。叢に依りて適として自ら憩い、澗に縁いて還て復た去く。微雨は芳原に霑たり、春鳩は何れの処にか鳴く。幽を楽しみて心は厭しは止まり、事に適えば跡は猶お掘るなり。終に罷めて斯に廬を結び、陶を慕うこと真に庶うべし。」とある。また、白居易の「隱者に寄す」に「青青たり東郊の草、中帰山の路有り。帰居臥雲の人、身を謀ること計らくは誤るに非ず。」とある。○迎気：春夏秋冬の気を祭り迎える。古代、立春の日に青帝を、立夏の日に赤帝を、立秋の日に白帝を、立冬の日に黒帝を祭つて豊年を願つたもの。沈佺期の「則天門赦して年を改む」に「六甲に黄氣を迎え、三元に紫泥を降す。」、同じく「赦を喜ぶ」に「喜氣は冤氣に迎え、青衣は白衣に報ず。」とある。張九齡の「立春の日、自晨に起きて積雪に対す」に「忽ち対す林卒の雪、瑤華処処に聞く。今年氣を迎うる始め、昨夜春を伴いて回る。玉は潤う窓前の竹、花は繁し院裏の梅。東郊斎祭の所、応に見る五神の儔を。」、同じく「聖製『瑞雪篇』に奉和す」に「昨は訝る驕陽數句を積むかと、始めて知る和氣新たなるを迎うるを待つを。惟だに人に在りて

利なるのみに匪ず、曾ち是れ天を扶くる意なり。」とある。また、孟浩然の「張丞相の『春朝に雪に対す』に和す」に「氣を迎えて春の至るに当り、恩を承りて雪の来たるを喜ぶ。」とある。○辛盤：五辛（薤・葱・蒜・薑）盤の略。五辛をまぜて盤に盛つたもの。元旦にこれ

を食すれば、五臓の氣を通じ健康を保つという。庾肩吾の「歳尽に令に応ず」に「聊か柏葉の酒を聞き、試みに五辛盤を奠す。」とある。○池柳将垂緑：白居易の「寶使君の莊水亭に宿す」に「使君何くにか在る江東に在り、池柳は初めて黄にして杏は紅ならんと欲す。」とある。

また、阮籍の「詠懷八十二首」其の七（『文選』卷二十三）に「芳樹は緑葉を垂れ、青雲は自ら逶迤たり。」とある。また、沈約の「八詠」のうちの「歳暮に衰草を慙れむ」に「華を含みて実を佩び、緑を垂れて紅を散ず。」とある。○苑花：王維の「聖製『蓬萊従り興慶に向かう閣道中にて留春、雨中春望』の作に奉和す、応制」に「鑾輿廻かに出ず千門の柳、閣道廻り看る上苑の花。」とある。また、白居易の「馬侍御の贈らるるに答う」に「苑花は雪に似て同じく暈に随い、宮月は眉の如くして直廬に伴う。浅薄に賢を求めて自ら代らんことを思う、嵇康は絶交の書を寄すること莫かれ。」とある。○凍融：孟浩然の「江を沂りて武昌に至る」に「残凍は風に因りて解け、新正に臘を度りて開く。」とある。また、白居易の「臘の後、歳の前、景に遇ひて意を泳ず」に「海梅は半ば白くして柳は微く黄なり、凍水は初めて融けて日は長ぜんと欲す。」とある。○風軟：王訓の「独不見」に「日は晚れぬ宜春の暮、風は軟かし上林の朝。」とある。また、費昶の「長門怨」に「絳樹は風に揺れて軟かく、黄鳥は声を弄ぶこと急なり。」とある。また、白居易の「東城の春意」に「風軟らかくして雲は動かず、郡城東北の隅。晚来春澹澹として、天氣は京都に似たり。弦管は宜に随いて有り、杯觴は無しと道わず。親故の縁の、共に飲娛すべき無きを其如せん。」とある。○春意：春の様子、また、恋愛の情をも言う。ただし、『莊子』

徳充符篇の「物と春を為す」の用例などを経て、宋学では宋学らしい含蓄をこめた語となる。梁の元帝の「春日」に「春意春已に繁く、春人春見えず。」とある。また、江淹の「臥疾して劉長史と怨別す」に「始懷

は未だ歎ずるに及ばず、春意は秋方に驚く。」とある。また、孟浩然の「春意」に「春情に艶逸多く、春意倍ます相い思う。」とある。また、韋応物の「聴鶯の曲」に「及ばず流鶯の日日花間に啼き、能く万家を以て春意聞ならしむるに。」とある。また、白居易の「晩春に閑居せしに、楊工部は詩を寄せ、楊常州は茶を寄せ、同じく来る、因りて長句を以て之れに答う」に「宿醒し寂寞として眠りて初めて起く、春意は闌珊として日は又た斜めなり。」、同じく「夢得ての、洛中の早春に七韻を贈らるるに和す」に「衆は皆な春色を賞す、君独り春意を憐れむ。春意は竟に如何、老夫此の味を知る。」、同じく「上巳の日、恩賜の曲江宴會に事に即く」に「翰苑に主の恩重し、曲江に春意多し。」、同じく「西省に花に対して忠州の東坡の新花樹を憶う、因りて寄せて東樓に題す」に「花は春意を含みて分別無し、物は人情を感じしめて浅深有り。」とある。また、和刻本『二程全書』卷之二・遺書・二十二丁に『生生、之を易と謂う』、是れ天の道為る所以なり。天は只だ是れ生を以て道と為す。此の生理に繼ぐ者は即ち是れ善なり。善は便ち一箇の元底の意志有り。元は善の長なり。万物皆な春意有るは便ち是れ之に繼ぐ者は善なり、之を成す者は性なり。…、同じく卷之七・遺書五丁に「静にして後万物を見れば、自然に皆な春意有り。」とある。○子細：白居易の「微之の官に到る後の書を得て通州の事を知れり、悵然として感ずること有り、因りて四章を成す」其の一に「来書子細に通州を説けり、州は山根峽岸の頭に在り。」、同じく「除夜に微之に寄す」に「家山の泉石は尋ねて常に憶い、世路の風波は子細に諳ず。」とある。なお、白居易の「山石榴、元九に寄す」(前出)に「閑かに両枝を折りて持して手に在り、細かに看れば人間の有に似ず。」とある。

【口語訳】

東の街はずれ、おめでたい立春の日に、五辛の野菜で料理を作った。池のほとりの柳の枝には緑の葉が芽生えたが、庭の草花に色とりどりの花が咲くのはまだ時間がかかりそうである。氷が溶けて魚の息も暖くなり、風は和らぎ鳥の声もくつろいだ様子だ。それぞれの物には春になって天地が物を生み出す働きがやどっているから、すべての物を詳しく

見るようにしなければならぬのである。

⑤(四十一) 春曉

【原文】

輕煙已抹野人家、曉色蒼茫坐煮茶。昨夜東風何所息、牆頭發出一枝花。

【書き下し文】

輕煙は已に野人の家を抹し、曉色は蒼茫として坐して茶を煮る。昨夜の東風何れの所にか息む、牆頭に發出す一枝花の花。

【注】

○輕煙：何遜の「落日前墟に望み范広州雲に贈る」に「輕煙に柳色澹く、重霞に日余映ゆ。」とある。また、王僧孺の「宴に侍す・又」に「散漫として輕煙転じ、霏微として商雲散ず。」とある。○野人：庶民。

飾り気がなく真心のある人。いなかもの。嵇康の「山巨源に与うる絶交書」(『文選』卷四十三)に「野人に背を炙るを快しとして、芹子を美しとする者あり、之を至尊に獻ぜんと欲す。區區の意有りと雖も亦た疎し。」とある。また、潘岳の「秋興賦」(『文選』卷十三)に「僕は野人なり。偃息すること茅屋茂林の下に過ぎず。」とある。また、周捨の「田舎に還る」に「心に野人の趣を存す、吾が膝を容れしむるを貴ぶ。」とある。また、王筠の「園菊を摘みて謝僕射挙に贈る」に「泛べ酌みて宜しく長久なるべく、聊か野人の誠を薦む。」とある。また、王昌齡の「磬を撃つ老人」に「双峯に褐衣久しく、一磬に白眉長し。惟だ識らん野人の意、徒だ看る春草の芳しきを。」とある。また、白居易の「周皓大夫の光福の宅に宴す」に「野人は敢えて他事を求めず、唯だ泉声を借りて醉眠に伴わしむ。」、同じく「裴令公の一たびは日日一たびは年年という雑言を贈らるるに和す」に「山客は硯の前に吟じて月を待ち、野人は尊の前に酔いて春を送る。」、同じく「陳二を訪う」に「出で去きて朝客と為り、帰り来れば是れ野人なり。」、同じく「表を拝して廻りて閒遊す」に「晨に興き表を拝して朝士と称し、晩に出でて山に遊びて野

人と作る。」とある。○曉色：夜明けの空の色。王筠の「衛尉新渝侯の『城を巡りて口号す』に和す」に「采憲に曉色分かれ、睥睨に秋霧生ず。」とある。また、伏知道の「從軍し五更に転ず五首」其の五に「五更に催して籌を送れば、曉色は山頭に映ゆ。」とある。また、虞世基の「江都に幸す」に奉和す、応詔に「澄瀾に曉色浮かび、遥林に宿煙巻く。」とある。○蒼茫：(一) 空、海、平原などの広々として果てしないさま。潘岳の「永逝を哀しむの文」(『文選』卷五十七)に「山を望めば寥廓たり、水に臨めば浩汗たり。天目を視るに蒼茫たり、邑里に面うに肅散たり。」とある。また、沈約の「晨に征し曉鴻を聴く」に「海漲の蒼茫たるに出で、雲途の瀾漫たるに入る。」とある。また、何遜の「行きて范僕射の故宅を経」に「激澗たり故池の水、蒼茫たり落日の暉。」とある。また、陰鏗の「伝郎の『歳暮に湘洲に還る』に和す」に「蒼茫として歳晚れんと欲し、辛苦して客方に行く。」とある。また、陳昭の「齊に聘して孟管君の墓を経」に「蒼茫として空壟路く、顚顚として古松枝えらる。」とある。また、王維の「山居即事」に「寂寞として柴扉を掩い、蒼茫として落暉に対す。」とある。(二) ぼんやりとかすんでいるさま。沈約の「夕べに行き夜鶴を聞く」に「海上に雲霧多く、蒼茫として洲嶼を失う。」とある。また、劉孝綽の「還た浙江を渡る」に「濛濛たり江煙の上、蒼茫たり沙嶼の無。」とある。また、徐陵の「関山の月二首」其の二に「月は柳城の東に出で、微雲掩うも復た通ず。蒼茫として白暈を縈い、蕭瑟として長風を帯ぶ。」とある。本文はどちらともとれるが、一応(一)で訳しておく。○煮茶：白居易の「清明の日に韋侍御の虔州に貶せらるるを送る」に「錫を留めて冷粥に和し、火を出して新茶を煮る。」とある。○東風：本『研究報告』第三十八号六十一頁・六十二頁を参照。○牆頭発出一枝花：「牆頭」はかきねのほり。侯夫人(前出)の「春日看梅二首」其の一に「砌雪に消ゆる日無く、簾を捲きて時に自ら顰す。庭梅は我に對して憐意有り、先ず露わす枝頭一点の春を。」とある。また、白居易の「日漸く長くして周殷二判官に贈る」に「日は漸く長く、春は尚お早し。牆の頭には紅勞の枝を露わし、池岸には新たに緑芽の草を鋪く。草を踏み枝を攀りて

頭を仰ぎて歎ず、何人か此の春の懷抱を知らん。」、同じく「元九の『東川の路の詩』に酬和す十二首」のうちの「嘉陵の夜懷うこと有り二首」其の一に「露は牆花を湿して春意深く、西廊に月は上る半牀の陰。」、同じく「重ねて城に到る七絶句」のうちの「劉家の花」に「劉家の牆上に花還た發く、李十門前に草又た春なり。処処心を傷めしめて心に始めて悟る、情多きは情少なき人に及ばずと。」とある。また、和刻本『二程全書』卷之十九・八十一b八十二aに「聖人の文章は自ら深し、文を為ることを学ぶ者と同じからず。繫辭の文の如き、後人決して学ぶこと得ず。之を化工の物を生ずるに譬う。且に一枝の花を生み出すが如き、或いは剪裁して之を為る者有り、或いは絵画して之を為る者有り。看る時相い類するに似たりと雖も、然れども終に化工の生ずる所、自ずから一般の生意有るが如くならず。」とある。なお、「一枝春」ならば梅の花の別称。六朝宋の陸凱の「范華に贈る」に「花を折れば驛使に逢い、寄せて隴頭の人に与う。江南に有る所無し、聊か贈る一枝の春を。」とある。

【口語訳】

朝もやが世を避けて住むわたしの家の周りに立ちこめている。夜明けの気配が広がり、座って空を眺めながら茶をたてる。昨夜の春風はどこにおさまったのだろうか。ふと垣根を見ると一つの枝に花が咲いているのが見える。

【解説】

「春曉」と言えば孟浩然の「春眠曉を覚え、処処に啼鳥を聞く。夜来風雨の声、花落つること知りぬ多少ぞ。」という詩が著名である。端山の作品ではそれを、風によつて花が散るのではなく、風が花を開かせたかのように変形してある。この変形は鮮やかである。儒学者が一般に「生」を尊重する姿勢の表現とも考えられる。本『研究報告』第三十七号三十頁を参照。

端山にとっては、唐詩や『二程全書』などの存在は大きい。宋明儒学者が詩をつくるには具体的にどうするかとなると、それらを拠り所にする他ないわけである。

注釈の作業で改めて確認できるのは、中国は同じことを何度も積み重ねて表現するということである。同じこととは、素材としては花や月、思想的には易などの五経や、論語、孟子、莊子などに書いてある内容である。唐詩にいたって、中国の詩は表現の型を完備した。その型の中に宋明儒学者の特質が注ぎこまれて、端山の詩が成立している。

注

- (1) 都城市立庄内中学校国語科教諭。
- (2) 鹿児島高等学校国語科教諭。
- (3) 岡田武彦他編集『楠本端山・碩水全集 全一巻』（葦書房、一九八〇）
- (4) 森野繁夫『謝宣城詩集』（白帝社、二〇〇二）二二九～二三〇頁。
- (5) 松浦友久『詩語の説相・唐詩ノート』（研文出版、一九八二）一五五頁～一七三頁。

（平成十六年九月三十日受理）